
輪廻の果てに

然原 秋砥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の果てに

【Nコード】

N7592J

【作者名】

然原 秋砥

【あらすじ】

名前も何もかも捨てたその少年は、ある日学院外の敷地で抜け殻のようなモノと出会う。

自らを「ゼン」と名乗る彼女との出会いが、少年を変える。

零話（前書き）

この話は、語り部の続きのようで、完全に別の話と誤って覚えて結構です。

一応繋がってはいますが、語り部を知らない方でも普通に読めます。

零話

数日前まで立派に栄えていた街。

しかし、今は見る影もなく廃墟と化してた。

突如現れた殺戮集団に、人々は為す術もなく殺され、瞬く間にその命の灯火を消してゆく。

そして、もうこの世界にほとんど命がなくなってしまった頃、ただの瓦礫の山となってしまった街に、彼女は立っていた。長い赤髪を乾いた風が攫う。険しい表情は、何者をも寄せ付けぬほど殺気立ち、周囲に気を配っていた。

と、突如凄まじい速さで何処からともなく現れた男が彼女に向かって刃を振るう。横一線に向かってくる刃の腹を手の甲で弾くと、今度は彼女が男に蹴りを放つ。が、男は身をかがめ易々とその攻撃をかわす。少女がギョツとしている間に、男は持ち直した剣を彼女に死角から突き出す。

彼女に避ける術はなく、その刃は少女の肉を易々と斬りつける。続けざまに少女は頭に蹴りを放たれ、体が宙を浮くという不思議な感覚を味わった。しかし、それはすぐに堅い岩にぶつかり、血を吐くような感覚に切り替わる。

間を置かず更に攻めようと剣を振り上げる男を一瞥し、少女は力を振り絞り力の限り叫ぶ。

「　　つ炎よ!!!」

瞬間、少女の目の前が真っ赤に染まる。

男が炎に吞まれ、見えなくなる。少ししてから、何かが倒れるような音がした。

それを確認したとたん、彼女はふうと脱力した。

「……お、わった」

しかし、彼女の表情は言葉とは裏腹に悲しげに歪んだ。揺れる瞳が、炎を凝視する。まるで、中にいる男を見ようとするかのように。

その時、聞き覚えのある声を耳が拾った。

少女は目を見開き、驚いたように振り返る。

そこにいたのは、彼女と同じような年頃の少女。黒いウェーブのかかった髪が、炎で赤褐色に染まっている。

どうして、君が。

少女は思うが、口にしなかった。すぐさま彼女の側へ行き、その手を取るうとした時。不意に、彼女の目が見開かれるのを確認した。そして、その表情が驚きと恐怖に彩られる瞬間を、見た。

「ウィーっ！逃げろっ！！」

彼女が口にするのは私の名前ではない。

彼女はきつと、私の名前すら知らないであろう。

彼女はただ、私に操られた哀れな友を助ける為に此処に来たのだらう。この人は、そう言うヒトだ。

危険だからと、今すぐにでも叱って連れて帰りたい。あの学院なら、きつと安全だらうから。

しかし、その願いが叶えられることは無かった。少女は、鈍い感覚と共に己の胸から突き出た刃をポカンと眺める。

一瞬後に、刃が引き抜かれ、灼熱の痛みと大量の血が溢れ出す。

何が起こったのか理解できぬまま倒れ込み、血反吐を吐く。

ザツという音がして、自分の正面に誰かが立ったのを認識する。激しい痛みで涙を流しながら、それでも少女は震える頭を持ち上げる。

そして、次の瞬間、痛みも忘れて目の前の光景に驚愕した。

「う、そ。お前は、さっき……」

先程炎のなかで倒れたはずの男は、不適に笑い片手を持ち上げる。その指先から、もどかしいほどゆっくりと炎が揺れる。禍々しいほど、深い漆黒の炎。

男は、異常なほど口の端をつり上げると、声は出さずに口だけを動かした。

《おしかったな、私の勝ちだよ。 クロラ。》

それは、何時か遠い昔に聞いた優しい父の言葉。

男は、少女の頬に涙が滑るのを確認した後、躊躇無く炎を放った。

また、守れなかった。

一、魂

ザアアアアア

ザアアアアア

外から聞こえてきたその音に、少女はふと顔を上げる。

腰まで伸びた、少しだけウェーブのかかった濃い赤毛。瞳は燃え上がる炎の真紅。この学院の、しかも炎の塔と呼ばれる施設に入っている者達は皆、赤髪灼眼であるが、ここまで炎を連想させるような美しい紅色を持っているのは彼女だけと言われている。

少女はトテトテと窓に近づき外を眺める。

窓から見る景色は、まず広い草原が始めに目に付く。それから、目を見張るほど巨大で、神秘的な塔。この巨大な塔はこの学園敷地内に全部で七つ建っており、どれもがそれぞれ意味を持つ。

まず【光の塔】を中心に置き、【炎の塔】【水の塔】【風の塔】いかすち【雷の塔】【生命の塔】【大地の塔】の六つの塔がその周囲を囲んでいる。光の塔にはこの学院の責任者が住んでいた。始まりの巫女と呼ばれる彼女は、一目見て純白という言葉を連想させるような容姿をしている。

ハツとするような白い肌。白銀の流れるような髪。彼女が好んできているのも、簡素ではあるが汚れなどは一つもない白いワンピース。そして、白いブーツ。ただ、その瞳だけが薄い金色で、全てを見通しているかのような光を放っていた。

まったく巫女らしさなどは全くない姿だが、それでも巫女と呼ばれていた。そして、またの名を白神^{はくしん}。

この世の創世守であり守人。生あるモノのすべての母。

少女のような姿をしているが、実は何千何億という長い年月を生きている偉大な方なんだそうだ。

そうだ、というのはもちろん誰もが彼女のことを語る時、口をそろえてそう言うのをそのまま思い出しているだけだからだ。しかし、少女にはその言葉にどうしても領けない理由があった。

確かに、ただ黙って座っていれば可愛らしい幼い少女なのだが、いかんせん性格に多少の難あり。

多くの者達は白神と話をするどころかほとんど面識がないので知らないが、周りの者達にかなりの無理難題をふっかけてくる少女なのだ。

やれ、ちよつと戦場の様子を見てこいだの。やれ、喧嘩つばやい不良共のいざこざを止めてこいだの。さらには、幻の生き物である火の鳥が見てみたい、連れてこいだの。かなりの我が侏姫だったりする。

大体、すべての創世守である彼女が幻の生き物と言っている時点で火の鳥とは存在しない生物のような気がするのだが、頭の良い友人にその事を伝えるとそうでもないよ、という返事が返ってきた。

なんでも、白神が作ったのは限られた力ある有力者達だけであと

の生物を創りだしたのはその有力者だという。だから例え白神が火の鳥を生み出していなくても、それが火の鳥はいないという確証にはならないんだそうだ。

その説明を受けても、やはりよく分からずに唸っているとその友人は笑いながら色々複雑なんだよと言ってきた。

それから、光の塔以外にはそれぞれ学生が学んでいる。

この施設は光術専門学院といい、簡単にいつてしまえば色々な世界から集まった生物が魔法を学ぶ場所だ。

主に学んでいるのは人と呼ばれる生物。人は、白神の姿にもっとも近いと言われている生き物である。人は神が己に似せて創った生き物であるという話はここから来る。

先程話に出た白神が創りだした“有力者”は、一般的に『神の子』と呼ばれており、彼らは白神をモデルとした生物を好んで生み出した。よって、知識ある生物は大半が人となったのである。

窓のから眺める景色は、いつもより薄暗く透明な宝石がパラパラと降っていた。

少女は窓から身を乗り出し驚いたように目を見開いた。手を伸ばすと掌が宝石を受け止めた。

濡れた己の手を少しの間凝視してから、少女はただでさえ乗り出していた体をフツと窓の外に投げ出した。少女がいたのは炎の塔の六階である。地上から百五十メートルほど離れていた所で普通の人間なら地面にぶつかつたとたん即死してしまうような高さだが、彼

女は構うことなく体からダラリと力を抜いていた。あと少しで地面にぶつかるといふところで、少女は身を翻すと小さく呟いた。

「上手く受け止めてくれよ」

突然、地面から空へ風が吹き上がる。

そして、風が、今にも地面に衝突しそうになっていた少女の体を拾う。そのまま少女はふわりと地面に降り立つと、何事も無かったかのように空を見上げた。

「……雨……」

体を容赦なく濡らしていく雨を、少女はただぼつと眺めていた。

不意に、少女は口元に笑みを刻んだ。まるで、嬉しくて、楽しくて、しかたがないと言つように。

「何年ぶりだろう。懐かしい」

そして、楽しそうに笑う。

懐かしい。

雨は、ふるさを思い出す。

毎日が楽しくて楽しくて仕方がなかったとき。
もう、二度と戻らない素晴らしかった、時の思い出。

魂(2)

ふいに、「にゃあ」という鳴き声が聞こえた。

声が聞こえたほうに顔を向けると、近くの茂みからガサゴソという音がする。少ししてからひょっこりと顔を出したのは小さな子猫だった。

その猫を認識した少女は驚愕に目を見開く。

「……黒、猫？」

この学院では己の能力によって髪や瞳の色が変化する。炎の扱いに特化した者なら髪や瞳は赤く。水の扱いに特化した者なら青く。

だが、髪や瞳が黒く変化する能力などない。よって、この世界には黒色の髪や瞳を持った者はいない。

……この猫は、一体なんだ？

とある部屋に少年が1人立っていた。色素の薄い、オレンジと行っても過言ではない赤毛の少年で、棚に立てかけた写真を何とはなしに眺めていた。そこに写っていたのは1人の少年、1人の少女、1人の女。3人も髪は黒く、こちらに向かって微笑んでいる。写っている少年は髪の色こそ変わってしまったが、今、写真を眺めている少年に違いなかった。

と、不意にコンコンっというノック音が聞こえた。そして、間を置かずに扉を開く音も。

少年は慣れた様子で扉の方へと向かう。

「返事をしていないのに開けないでくださいと何度言えば分かるんですか、ファイさん。……っていうか、あなたどうしたんですか？」

ファイと呼ばれた少女はビショビショで、少年に向かってニツコリと微笑んでいた。

「あいな、あいな。おもしろいモノ拾って……っわぶ！」

ファイの視界が白に染まる。次いで顔に柔らかい感触。手に取ってみると、ふわふわの清潔そうなタオルだった。顔を上げると少年が面倒くさそうにこちらを見ていた。どうやら彼が投げってきたようだ。

「とりあえず体を拭いてください。風邪でも引かれたら困りますし、何より部屋を濡らされるのは勘弁ですから」

「おお、サンキューな」

そう言って、ファイは長い赤毛を揺らして笑った。だが、彼女は自分の体を拭かずに足下にあった何かを拭き始める。おそらく、先程彼女が言いかけていた「おもしろいモノ」だろうとだいたい予想する。

しばらくそうしてガシガシと中にある”何か”が哀れになるほど

乱暴に拭かれているのを見てみると、ファイが不意に話しかけてきた。

「そついやスー。お前授業今日は出てないのか」

「……ファイさんはお忘れかもしれませんが俺は一応一ヶ月前に学園内での課題を全て終了して卒業してます」

…その場に、沈黙が降りる。

「あ、あはは。そつだっけか？時が経つのは早いなあ。あはははは」

「そーですね。俺よりも一ヶ年上であるはずの誰かさんは何度目の留年でしたっけ？」

「まだ二度目だよ！」

「と言うことはまだ一度も進学してないんですね」

スーの呆れたと言わんばかりの溜め息に、ファイはぐうの音も出ずに固まる。

「なんなんでしょうねえ。体術だけなら学年トップなのに学力が学年最下位というこの格差。俺はファイさんの頭の中を一度でいいから観察させて欲しいです」

「うるせー。普通は卒業まで十年かかると言われているこの学園を三年で卒業するような化け物の話なんて聞きたくねえー」

「俺は体術は苦手なんですけどね。それより、ファイさんこそ大丈夫なんですか？どうせ雨が珍しくて授業を途中で放り出したんですよ。今頃皆さん探してますよ」

「……もう、いいよ。今帰っても後から帰ってもどうせ反省文だ」

「やいで」

っと、スーがタオルの中で何かがモゾモゾと動いていることに気がついた。ファイもその事に気がついたのが、自分の手元に目をやる。

「そう言えば、それはなんなんですか？」

「あー、さっき中庭で拾ってな。面白そうだから持ってきた」

面白そうだから持ってきたって……本当にこの人の頭の中はブラツクボツクスだ。と、溜め息を吐くスーの事は気にせず、ファイはタオルをめくった。

中から出てきたモノを見て、スーは驚いたように息を詰まらせる。

「……凄い濃い青の毛並みですね。一瞬本当に黒猫かと思いました」

「お前って本当に驚かせがない奴」

コレだから頭のいい奴はっ！と、ファイは頬を膨らませた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7592j/>

輪廻の果てに

2011年10月9日21時02分発行